

ミライのフツーに向かって

山村と都市が共存する豊田市で、どんなミライをめざしていくのか。そのミライのフツーをどのように創っていくのか。おいでん・さんそんセンターを運営する(一社)おいでん・さんそんの正会員に想いを語ってもらいます。

第13回 内藤 麻美子さん



1985年、静岡県出身。高校2年のとき、聞き書き甲子園(<http://www.kikigaki.net/>)に参加。その卒業生たちの活動のなかで、日本各地の山村地域に出会う。大学卒業後に自治体職員を経て、結婚を機に聞き書き甲子園活動地域であった豊田市の山村地域に飛び込む。

私の記憶の中で、いちばん初めの大きなニュースは阪神・淡路大震災です。テレビでは被災した街の映像や、どんどん増える死者数が流れ、幼いながらも「大変なことが起きた」と感じました。さらに、地下鉄サリン事件、神戸連続児童殺傷事件など、私の思春期には衝撃的で悲しい事件が続きます。また、私たちは「キレる17歳」と呼ばれる世代でもありました。

それらが影響してか、被災者や被害者、あるいは犯罪者の立場に、自分もいつなるかわからない、そんな不安を感じていました。大学生になる頃には「なぜこんな暗い時代を作ってきたのか」と反発する気持ちも持つようになります。

その頃に出会ったのが、東北の山村地域に住む当時70代のお爺さんです。彼は、学生である私たちに対して「自分たちが社会を間違った方向に進めてしまった」と謝罪し、「社会を少しでも良くするために、力を貸して欲しい」と伝えてくれました。その言葉を聞いて、それまで感じていた不安や心のわだかまりが解け、同じ時代を生きる者として、一緒に頑張ろうと素直に思えたことを思い出します。

それから15年が経ち、自分がどんな社会を生きたいかということより、次の世代にどんな社会を手渡せるのかを意識する年齢になりました。

同じ時代を生きる人たちが、年齢や性別、住んでいる場所や立場に関係なく、お互いを認め合い、許し合い、支え合いながら、それぞれの明るいミライに向かって進むことができる。そんな社会がミライのフツーになるのは、もうすぐ。そう信じて、これからも自分と家族、地域に向き合って生きていきたいと思います。



学生、地域住民が一緒になって行った地域行事

イベント情報

すげの里周辺での自然体験 参加者募集

私たちはBuruponです。ここ豊田市で、もう一つの故郷・居場所となるDAOH村のような農村を自分たちで楽しみながら作りたい!それはきっと、里山の人たちの笑顔にもつながるはず。そんな想いから、里山に住む方々と手を取り合いながら農村づくりにチャレンジしています。どんな村にするか、どんな面白いことをするかはあなた次第!里山とまちに住む人たちが助け合い、お互いがより豊かに暮らせるようにという想いで活動しています。

●参加方法

①農・里山体験【ゲスト会員】参加費:1,000円~/回(参加時に支払い)
各イベントにスポット的に参加。普段の生活ではできない様々な自然体験に気軽に参加してみませんか?

②農・里山体験【コミュニティ会員】

年会費(※2023年度モニター価格):10,000円/1世帯

受付:先着5組

年間を通じてBuruponが提供する様々な体験へ参加でき、みんなで作ったお米や野菜などを持ち帰ることができます。好きな野菜を育てることができる専用の区画も無料で提供します。(年会費は、市場価格で、お米と野菜8,000円分、畠利用料2,000円分を想定。お米と野菜は、その年の収穫量によってもらえる量が変わる可能性があります)

応募締切:2023年4月30日(日)

③運営・企画メンバー

私たちと一緒に、自分たちの農村づくりを運営・企画してくれるメンバー大募集!こんな事をやってみたい、里山のこんな課題を一緒に解決してみたい、という方はぜひBuruponで仲間と一緒にチャレンジしましょう!

●活動拠点 | 豊田市新盛町(足助地区)『豊田市里山暮らし体験館すげの里』周辺

●こんな活動が始動しています

*田んぼ・畠の再生プロジェクト(耕作放棄地を再生し、地元の方に作り方を教えていただきながら、お米や野菜づくりをしています。)

*眠れるお宝資源発掘プロジェクト(豊田市産の端材を使った箸づくり体験など、里山にある眠れる資源を宝に変えることを目指しています。)

*季節の里山体験プロジェクト(春はタケノコ堀り、夏は蛍観賞、秋はサツマイモ堀り、冬は門松づくりなど、里山で四季を感じられる体験を色々企画して、地元の方とみんなで楽しめます。)

●問合・申込 | burupon.toyota@gmail.com

●活動の詳細については、SNSアカウントをご覧ください→



Facebook



Instagram

●新型コロナウイルスの感染拡大状況によって完全オンラインになる場合があります。

■スタッフ退職のお知らせ■

3月いっぱい、木浦幸加は退職することになりました。今後は、旭地区を拠点に取材・執筆等を、個人事業としてしていく予定です。約8年間、在職中は地域の皆様、関係者の皆様に大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

「つながる力でミライを変える」おいでん・さんそんセンターの活動をご紹介!



おいでん・さんそんSHOW

3月号
2023.03.01発行

全域
ぜんいき

PICK UP

第10回いなかとまちのくるま座ミーティング、3年ぶりの対面開催

『つながる力で変わる“じぶんごとのミライ”を考える



第2部くるま座ぷらっとミーティングでは、3つのグループに分かれて話し合いを行った

2月11日(土)に「いなかとまちのくるま座ミーティング」を小原交流館で開催しました。おいでん・さんそんセンターでは、都市と山村の交流促進に向けて、市内外の取組事例やノウハウについて参加者同士が情報共有を図るとともに、同じ課題に取り組む関係者とのネットワークを構築し、互いの今後の取組に生かすことを目的に毎年開催しています。

当日は総勢57名の方が集まりました。過去2年がオンライン開催ということもあり、参加者ははじめスタッフも久しぶりの対面開催で同じ空間を共にする「つながり」を肌で感じていました。

今回のテーマは「つながる力で変わる『じぶんごと』のミライ」。山村地域は急激な人口減少により、従来の「住民自治」頼みでは維持が難しくなっています。都市部の方たちが地域に関わり、課題解決に取り組む「関係自治」これが、これからの持続可能な地域の姿と考えています。これ

はどの地域でも言えること、つまり誰にとっても「じぶんごと」のテーマです。

山村地域の活動者トークセッション

第1部では豊田市の山村地域をフィールドに「関係自治」を広げる活動をされている4名のパネリストが事例を紹介しました。

市街地の住民が田舎の課題を「じぶんごと」に

最初に話をしたのは、里山とまちをつなぐ有志団体「Burupon」の活動をしている辻竜也さんです。県外出身で市街地在住。しかも、もともと豊田市に愛着を持てなかった辻さんが、農業体験で通った足助地区を第2の故郷と感じ、地域課題解決のためBuruponを立ち上げた経緯を話しました。



(左)いなかとまちをつなぐ活動をするパネリストが、事例発表。左から、コーディネーター洲崎さん、Burupon・辻さん、Kinoファーム・木下さん、三河里旅・鈴木さん、北小田の家・荒川さん(右上)『自治研究プロジェクト』のくるま座談義では、農業機械の維持管理が話題に上がった(右下)左端・田中センター長、左から4番目からくるま座談義を進行した高野さん、戸田さん、村田さん、右端・まとめの全体会進行の鈴木さん

辻さんは、愛知県に住む、農体験・里山体験に興味がある約200名を対象にアンケートを実施したところ、約7割の方が里山体験をしたことがなく、そのうちの多くから「きっかけがあれば参加したい」という回答があったそうです。まち側の住民が気軽に山村に足を運べるように農体験を企画・実施しています。2024年には農を通じてまちと里山をつなぐ「Burupon FARM」の開園も計画されているそうです。

課題解決のキーワードは『つながり』

次に話されたのは、下山地区のKinoファーム木下貴晴さんです。下山出身で2018年に農家としてスタートした木下さんは、「中山間地農業は後継者がほとんどいなくて深刻な状況」と語りました。

その中で、豊田市街地の会社が始めた『半農半製造業』な働き方を受け入れたり、都会の消費者と直接契約して農地の耕作を維持する「自給家族」を始めたり、様々な挑戦をしています。関係人口を受け入れる側として、「Kinoファームが『つながり』の中心になれたら」と話されました。

ニッチでローカルな地域限定旅行でつながる

次に登場したのは、小原地区の広告デザイナーであり、



地域限定観光業「三河里旅」を営む鈴木孝典さん。地元の元気のなさが気になったことから、地域の良さを見つめ直して知ってもらうための地域限定観光業を始めました。

地域に足を運んでもらうことでファンができ、地域への経済循環など波及効果が大きいそうです。実際に実施された企画ツアーも紹介され、どれも興味深いものばかりでした。「知らないだけで、掘り下げればどの地域でも面白くなるので、いろいろな場所で応用してもらえば」と話されました。

ふるさとを自分で選ぶ時代

最後に登場したのは、足助地区北小田町で歴史ある古民家をリノベーションし、レンタルスペース・民泊『北小田の家』を運営する荒川偉洋子さんです。田舎暮らしワークショップの先生は地元住民の方々。関係性を大切にする参加者の様子を見ていると「故郷は自分で選ぶ時代が来たのではないか」と感じるそうです。今後も映画の上映会などを企画して、様々なコミュニティの場になっていければと話されました。

第2部くるま座ぷらっとミーティング

豊田市山村地域は、人口減少・高齢化に直面しています。

これは山村の課題のみならず、今後都市部でもますます進行していくことが明らかです。今年度、おいでん・さんそんセンターでは「人と地域の学びの循環プロジェクト」、「地域経済循環プロジェクト」、「自治研究プロジェクト」の3つのチームを作り、人口減少・高齢化社会で生まれる課題にどのように対応していくか、研究を進め、学んできました。第2部の前半では各プロジェクトごとにテーマを掲げて参加者は興味のあるテーマの部屋へ20~30名ごとに分かれました。

人と地域の学びの循環プロジェクト

(株)M-easyの戸田友介さんは、「地域で働き多くの時間を地域の人と共にしていると、課題が課題になる前に解決するコミュニケーションができる」と語りました。その後の座談会では、戸田さんが「お金との向き合い方は、先に「稼ぎ」ではない。関係性の中で役割を担い、いずれお金が発生して仕事になっていくこともある。田舎ではお金が万能ではない」と話をしました。

地域経済循環プロジェクト

(株)ピー・エス・サポートの村田元夫さんは、「豊田市のある山村地域の事例では年間消費額の7割、1.4億円が地域外に流出している。その内の1%でも地域内で消費できれば、多くの移住者家計を養える計算になる。「地域でお金を循環させるには」をテーマに、地域資源を使ったビジネスのアイデア出しをしましょう」と語りました。座談会では、地域エネルギー、観光、ケア・教育についてグループに分かれて話し合いました。村田さんは、「覚悟を決めて物事を進める人の存在が大切だ」と語りました。

自治研究プロジェクト

名古屋大学大学院教授の高野雅夫さんは、「空き家の活用

方法は確立してきたが、農地・山林も含めた3点セットで活用していかなければ里山再生はできない。都会の人が心身の回復に使う活用方法もある。「家・農地・山林の引継ぎ方と自治力とは」について語り合いたい」と話をしました。座談会では、今後の農地の活用が課題という話題が上がり、高野さんは、「担い手の減少がさらに進む。今後は、集落営農やグループ農業などのみんなでやる農業、新規に自給のためにやりたい個人の農業の2パターンが増えていくと予想される。農業をやりたい人と地域をつなぐ相談先が必要。農業機械を共同で使える仕組みがあると良い、などの意見が出た」と話しました。

各グループの話し合いから、「つながる力」が課題になることを未然に防いだり、今後、課題を解決するために求められていることが共通して挙がっていました。

参加者からも「参加者同士で話すことを通して、問題解決への道を開いていくという体験ができた」という感想が寄せられました。コーディネーターの鈴木雄也さんは、少し前に都会から旭地区にUターンした経験をもとに、「都会では個人の悩みは個人のもの。田舎では個人の悩みをみんなの悩みとして考えるのが面白いし助かる」と話しました。

私たちは、関係性の中で生きています。困ったことがあれば相談できること、お互いに心を寄せ合うことなど、『未来を変えていくために日々の生活の中でできることがある』と、改めて感じる一日となりました。(小黒敦子)



『地域経済循環プロジェクト』のくるま座談義の様子

●おいでん・さんそんSHOW発行終了のお知らせ●

おいでん・さんそんセンターの情報発信のあり方を見直すため、今月号でおいでん・さんそんSHOWの発行を最後とさせていただきます。2014年10月号から今月号まで、センターの活動、山村地域の取組などをご紹介してきました。これまでご愛読いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。4月から新たな形で情報発信していきますので引き続き応援よろしくお願いいたします。